

経緯をさらに提示されると、さらに研究に

深みが増すのではなからうか。資料提示の上で、近代との比較や考察を読みたかった。

伝説は単なる歴史に基づく空想の所産には留まらない。その意味で船大工が管掌する儀礼と伝説の関与、祭礼と伝説との関連性について調査を重ねた究明が興味深い。埼玉県寄居町末野は特異な事例のようであるが、それ以外の事例、進水式におけるオトタチバナヒメが登場する事例とそうでない事例との相違なども、今後期待したい課題である。

その地で伝説がどのように生きてきたのか。人々に求められ生かされてきた伝説が今もなおどのような形で存在するのか。そして伝説は人々を如何に活かすのか。評者も永年伝説の調査を重ねる中で、歴史を超えて、伝説がひとりで動き出すことがあると感じている。伝説が土地の求めに応じ変化をするだけでなく、土地の人々に働きかけ、会話をするように生き生きとその存在感を放つのである。実生活で船を操る人が注意喚起のために伝説を認識するといっ

た報告は、まさに伝説が現実的に益をもたらすものといえ、生活に地域に人々に生かされた、あるいは地域を活かす伝説に値する。

物語を読み解くにはその地域の地理的特性、歴史性、特有性に注目することが大切である。生活者たちの実際の体験が文芸に反映されてきたと思われるからである。具体的な様相を通じ、海辺の人々の実践と認識（信仰）を知ることが、難所に対する意識を感受することにつながるだろう。人が危難をどのように捉え、いかに回避しようと考えたのか。伝説の内容と人々の向き合い方から考察することは大変意義深いものである。そうした観点からも、「オトタチバナヒメ伝承」は、実は我々にとって親近感を持つべき事象なのだ気づかされた。

（注）例えば、網野善彦『女性の社会的地位再考』（神奈川大学評論ブックレット、御茶の水書房、一九九九）は女性に対する男性支配の見解を研究史として簡潔にまとめている。

書評

廣田收著

『民間説話と『宇治拾遺物語』』

花部 英雄

本書は国文学（文献）研究者から口承文芸研究者に向けて突きつけられた課題といえる。口承、書承を問わずテキストである

表現を、異なるジャンル（神話、説話、昔話）との比較の上から読み取る独自の「説話分析の方法」は、これまでになかったし、今後このような問題意識で研究する人も出てこないかもしれないので、ここではその方法の可否を見定めておく必要がある。おそらく五九〇ページにわたるこの書物を読了する口承文芸研究者は数えるほどであろうから、ていねいな本書の紹介を心がけたい。

前置きはそれまでとして、まずは全体の内容を、目次の章節で示しておきたい。

序章 文献説話の話型と表現の歴史性――

対照軸としての昔話、昔話研究――

第一章 『風土記』の在地神話と昔話、そして中世説話
第二章 昔話の話型と語り―昔話「鳥吞爺」と唱え言をめぐって―

第三章 昔話と説話分析
第一節 昔話「瘤取爺」の日韓比較研究
―日本昔話の特質はどこに認められるのか―

第二節 昔話と唱え言・昔話の唱え言―話型と伝承的表現―
第三節 「韓国口碑文学大系」の採録と語り―日本笑話「和尚と小僧」との比較をめぐって―

第四節 「韓国口碑文学大系」の口碑「新房のぞき見」の話型―日本説話との比較をめぐって―

二〇二〇年六月 岩田書院刊
本体八四〇〇円
（ないとう・ひろよ／國學院大學兼任講師）

第五節 天人女房の神話と昔話
第六節 光前寺略縁起と早太郎伝説
第四章 『宇治拾遺物語』孤立話考
第一節 孤立話から見る『宇治拾遺物語』の特質―仏教の世俗化と本覚思想―

第二節 『宇治拾遺物語』第一九話「清徳聖妻奇特事」考
第三節 『宇治拾遺物語』新羅国后考
第四節 『宇治拾遺物語』世俗の規範を
探る

第五章 『今昔物語集』との同一説話考
第一節 『宇治拾遺物語』慶植考
第二節 『宇治拾遺物語』佐多事考
結章 文学史としての『宇治拾遺物語』

都合十六本の論考が収録されているが、ここでは第四章「宇治拾遺物語」孤立話考」および第五章「今昔物語集」との同一説話考」にある論考は、純粹に説話の研究であり、口承文芸研究との関連が薄いので、ここでは割愛して、口承文芸にかかわるその他の論考を書評の対象として取り上

げることとする。

まず、先述した本書における口承文芸研究の「独自の説話分析の方法」について説明しておきたい。そのことに触れるのに都合のいいのが、序章の「文献説話の類型と表現の歴史性」である。著者はこれまでの説話研究における「文献相互の関係」に特化した追究に飽き足らず、越境して「口承と書承」のテキスト分析へと踏み込むために持ち出したのがこの方法である。

説話、昔話のテキストの表現を、すべて「主語＋述語」の事項で示し、その中で基本的な事項と付加的な事項とに選り分け、その基本的事項の内容をさらに抽象度を上げていくことで、表現の「基層」にあるものがテキストのジャンルを越えて、「話型」として抽出できるとする。その基層の確認と同時に、基層の上にある「表層」の内容こそが、テキスト間の比較によって見えてくる特質として理解できるとする。

たとえば、昔話「葦しべ長者」を十五行の事項群に整理し、さらに抽象度を上げ十行にすると、次の結果になるといえる。

昔話と比較すると、『宇治拾遺物語』の主人公は、昔話の主人公が無欲にも、自ら困っている者に物をあげようとするのに対して、少しばかり嘘をついたり駆け引きをしたりして、交換が有利になるように、ことを運ぼうとするところに特徴があることが分かる。

語りと文字による記述との差異をこのように指摘する。この方法で日本の昔話と韓国の「粟一つぶで婿入り」とを比較し抽象度を上げていくと、物の交換に「思想が顕在化」してくるとして、韓国では交換を有利な方向へと「みずからの意志によって行動を起こす」のに対し、日本の葦しべの男の交換は「見返りを求めない、無償の行動」で、何者か超越的な存在の意思に「身を委ねている」とし、「ここに日本昔話は、天

ところで、この「説話分析の方法」は一見すると、ロシアのプロップが唱えた「形態論的構造」に似ている。すなわち、物語の時間的な流れの中で継起する事件を「行為」に求め、それを「機能」と呼び、その連続的な統合体として昔話を把握するものであるが、しかし、著者はそのことはおろぎにも出さない。あるいは期せずして発想が一致したということであろうか。

第一章の「風土記」の在地神話と昔話、そして中世説話は、『風土記』から『宇治拾遺物語』そして「隣の爺」型の昔話に通底する「誓約」の原理を取り上げる。「瘤取り爺」における鬼と爺の瘤をめぐる約束は、富士山と筑波山とが新嘗の物忌みに神祖尊を迎えての対応と同様で、「神の意志」との交感である「誓約」に相当するといえる。これを「基層」とすると、『宇治拾遺物語』における百鬼夜行のような鬼どもが首領の鬼を横座に、御遊びの猿楽を行なうという「表層」は、平安京を舞台にした「説話集の成立した時代における歴史性」が明瞭になるといえる指摘は鋭い。「神話を

説話や物語、昔話の古層もしくは基層と捉えたときに、昔話や説話の本文は、伝承の構成体として見えてくる」という視点は、壮大なスケールの話のとりえ方を示しているといえる。

第二章の「昔話の類型と語り―昔話「鳥呑爺」と唱え言をめぐる―」は、昔話「鳥呑爺」の唱え言を中心にした論究である。著者は唱え言に対して、一通りではないこだわりを持つており、本書ではこれ以外にも、第三章第二節も唱え言を中心とした論究であり、他の論考でも随時取り上げられているので、関心の深さがうかがえる。著者自身が長野で聞いた話者の唱え言を丹念に分析し、それをもとに全国の「鳥呑爺」の資料を博捜し、これを一覧表に示して考察に用いる。その結果、唱え言にも古層の壽詞と、殿様の繁栄を寿ぐ表層のものにと構築化されていることを確認する。

ただ、筆者の提唱する「説話分析の方法」は、歴史の変遷に視点を置いた場合に「基層」の内容が信仰的事実に収斂していくこ

とにいくぶん違和感を覚える。これには筆者の論法の基軸に柳田國男の「口承文芸史考」が大きな比重としてあることと関係しているのかもしれない。柳田の口承文芸論の根底に「神話」や「信仰」があることは周知の事実ではあるが、ただこれに依拠しすぎると、その他の面すなわち口承文芸の社会的側面や生活的発想が霞んでしまふ。著者の斬新な「説話分析の方法」の限界を、この点から修正を加えていく必要があるかもしれない。

続く第三章「昔話と説話分析」は、昔話研究の各論であるが、そのうち前の四本は『韓国口碑文学大系』の論文題名にもあるように日韓の比較研究を中心としたものである。第一節「昔話「瘤取り爺」の日韓比較研究―日本昔話の特質はどこに認められるのか―」は、日本の「瘤取り爺」を踏まえての日韓の比較である。まず、韓国の「瘤取り爺」六話を取り上げ、基本的な事項群を確認し、上手な歌は瘤が歌うとトケビに思わせて取って貰うところに特徴があると

場所が野山である日本に対し、韓国はトケビの棲む空き家、登場するトケビと日本の爺の性格差、そして瘤の奪取がトケビとの「問答」の機転に対し、日本の爺の天狗に加わる主体性といった対比に集約させる、順当な結論といえる。

しかし、問題はそれとの国際比較の目的についてである。著者は立石展大の比較研究が、「話を支えている民俗に目を配りつつ、話や伝承の特徴を探る」と述べたのに対し、自身の研究を「言葉としての昔話、本文としての昔話、表現としての昔話」にあるとする。いくぶん差異化を意識しすぎた印象があるが、しかし、言葉や表現に中心を置くのであれば、逆に「声」の口承文芸の特質の否定につながりかねないし、昔話から遠く離れてしまうことになるだろう。声が民俗（族）性、社会性を基盤にしていることを簡単に見てはいけなからである。

第二節「昔話と唱え言・昔話の唱え言―話型と伝承的表現―」は、長野県の語り手の桜井小菊が語る「尻鳴り籠」の歌

(著者は唱え言として扱う)に注目した論究である。その歌が民謡「花讀めの祝歌」であるが、なぜここに登場するのかについて、語り手の特性を、「基層／表層」の構造においてとらえる視点を示したものと見える。第三節「韓国口碑文学大系」の採録と語り―日本笑話「和尚と小僧」との比較をめぐって―は、韓国の「食べる」と死ぬ干柿」と日本の「節は毒」(ちなみに狂言では「附子」と比較対照したもので、両者の比較に加えて、語りの衰退や採録、翻訳の問題などにも言及する。

第四節「韓国口碑文学大系」の口碑「新房のぞき見」の話題―日本説話との比較をめぐって―は、韓国の口碑「新房のぞき見」は、花嫁が殺害されるというシヨッキングな世間話であるが、その類話を周辺国に探して方向づけたいとするのが趣旨である。民間伝承にあるのは初夜の艶笑譚で、殺害という物騒なものではない。しかし、『日本霊異記』『今昔物語』『伊勢物語』などには「食人鬼」の類話があり、背景に結婚制度との関連が想定されるとい

る。第三章第六節「光前寺略縁起と早太郎伝説」で、直接に取り上げることができなかった「猿神退治」の説話の分析を具体的に示しながら、『風土記』から『宇治拾遺物語』そして昔話へと通底するものを「文学史」として提示し、「ひとつの表現は内在的に基層と古層をもち、その上に表層と新層を重ねる形で仕組まれ構築されている」とするのが、著者の訴えの中心といえる。

ところで、最初に「本書は国文学(文献)研究者から口承文芸研究者に向けて突きつけられた課題」であると述べた。今は、その刃に應えるべき時かもしれない。再三取り上げてきた「説話分析の方法」は、著者が国文学の現状の「出典研究の呪縛からどう逃れるか」ともがいた末の具体的方法であろうから、真摯に答えるべきであろう。率直に言って、その発想はよしとするが、完成には未だ至らずという状態といえる。その理由を思いつくまま上げると、一つは、『宇治拾遺物語』から発想するが、そこに執着せず、すべての文献研究の地平に立つことが必要かもしれない。その上で、方法

う。さらに中国の古典にも類話があり、しっくりこないが、「基層／表層」の構造把握からするとゆるやかな話型が見えるとするが、いま一つ決め手に欠ける。

第五節「天人女房の神話と昔話」は、近江の余呉湖の天人女房の伝説から出発し、日中韓の天人女房の伝承や研究を概観しながら、その古態を求めて漢籍や古文獻を追究し、古代中国の燕の卵から出現する「王朝始祖神話」に行き着く。これを淵源として、その後の天人女房の話型を整理、系統づけるといった、時空を羽撃くような構想ではあるが、一方でそれと背反するように空疎な部分も目立つ。昔話伝承を歴史文書等との安易な照合といった比較の問題や、昔話の誕生譚と婚姻譚とを結びつける荒っぽさは検討の余地がある。着想のすばらしさに論証が追いついていないという歯がゆさがある。

第六節「光前寺略縁起と早太郎伝説」は、長野県駒ヶ根市光前寺の飼い犬が、静岡県磐田市の見付天神の怪物を退治したという内容で、縁起に記録され伝説としても流布

の精度を高めるために、まずは極力事項の設定に恣意性のない科学的方法へと磨きをかけて欲しいということである。と言って、その具体的な知恵はないが、とりあえず八十年も前になる柳田の昔話理論を絶対視することなく、その後の研究成果を広く取り入れるべきである。口幅つたい言い方になるが、関敬吾の『昔話の歴史』は「天人

しているものである。そこでまず、光前寺にかかわる数本の縁起類の検討から始める。江戸後期の縁起の初めごろのものは開創縁起に「早太郎伝説」の骨子が組み込まれたが、そこには人身御供や生贄はなかったが、しだいに早太郎がメインとなり、関連するエピソードも多彩になって、不動尊と霊犬の物語の体裁を整えていくという。

この縁起研究をもとに、光前寺や見付天神等への聞き取りを加え、さらには歌舞伎や黄表紙等のメディアの影響を取り込みながら、「テキストとしての縁起の重層性が歴史的に生成されてきた」と述べる。縁起の生成に社会的動向が深く関与していることを明らかにする。ただ、「猿神退治」の説話や昔話「しつぺい太郎」と、この縁起や早太郎伝説がどのように交錯するのか、追究して欲しかった。ただ、この問題は、「結章」へと続いていくことになる。

結章の「文学史としての『宇治拾遺物語』」は、これまで取り上げてきた「説話分析の方法」の再確認の意味合いを込めたもので、本書における著者の訴えの核心である。女房」の研究には必見。それからウラジミール・プロップとマックスリュティイの研究を、「説話分析の方法」に参考して欲しい。校務から解放された今こそ、ご健闘と成功を祈念します。

二〇二〇年三月 新典社刊
本体一七、二〇〇円
(はなべ・ひでお／國學院大學)

書評
今井秀和著

『異世界と転生の江戸―平田篤胤と松浦静山』

佐藤 優

本書は、今井秀和氏の学位請求論文『甲子夜話』怪異・奇聞の研究』の執筆を通して浮かび上がった論点を、発展させて論じたものである。すなわち、『甲子夜話』を著した松浦静山を中心に江戸後期における知識人の奇聞に対する興味を示し方やその前提となる知的基盤について、当時江戸に流布した二人の少年の怪異的話題を軸と

しながら詳細に論じている。全体の構成を概観すると、第一章から第三章までが『仙境異聞』論、第四章から第六章までが『勝五郎再生記聞』論、第七章から第九章までが松浦静山と平田篤胤論である。そして、終章において、このような怪異的世界観の醸成に重要な役割を担った江戸後期の知識人達の知的営みの背景につ